

私と娘は親子で、いろいろな科学現象を見せるサイエンスショーをしています。「子どもたちに楽しく理科を教えるには？」を追究した結果、「子どもが子どもに教えればよい」という結論に至りました。その時にちょうど漫才で話を磨いていた5歳の娘とコンビを組み、父娘サイエンスショーをすることになりました。結果は大好評で娘が高校3年生となった現在もサイエンスショーは続けます。

⑦ わが家の読書術

サイエンスショーは全国から依



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

頼がくるので、親子で科学館巡りをするようになります。理科の実験に触れる機会の多い娘は「理科が得意やろ?」とよく質問されま



す。しかし、娘が得意な教科は何と国語!?

やるかもしれません、少し工夫をしています。わが家の本棚には購入した本がありません。20冊くらいが入る小さな本棚ですが、これは図書館の本を入れるための専用。近所の図書館は娘と息子を合わせて、最大で20冊の本を借りることが出来ます。

「20冊も借りると読まない本も出てくるのでは?」と思われるかもしれませんが、そこは大丈夫。本に興味を持ち始める幼児期は、少ない冊数を借りて読み聞かせをしてあげます。そして、徐々に放置しても自分から読むように仕向けるのです。最初は失敗ばかりで読まない本もありましたが、何冊かは読みます。その読んだ本は娘にとっては興味のあるジャンルとなり、次に借りるときは、同じ作者やその本の内容に近い本を借りてあげるのです。



興味関心に沿い好機逃さず提供

また、あえてホットケーキを作った時は「しろくまちゃんほっけーき」を借りるなど、その時のタイミングや娘の興味に合わせて本を選ぶこともしていました。そして、いつの間にか2歳年下の息子も難易度の低い本から読みはじめ、お姉ちゃんと同じペースで本を読むようになりました。最終的には絵本が分厚い本となっていく、ページも返却期限の2週間までに読み終わり、最速では1週間で20冊を交換という時期もありました。

幼少期の私は無理やり本を読まされたことに大きな抵抗があり、本が苦手でした。しかし、子どもたちの興味関心やタイミングを計りながら提供することで子どもたちは本が大好きになるのです。読書の秋、こんな取り組みをされてみてはいかがでしょうか。



と偉そうに語りましたが、今回の取り組みは、すべて妻の考えによるものです(笑)。「子どもたちの興味関心に寄り添う育児」。本を借りてくるだけの取り組みですが、そこに意図があるだけで、誰でも実践できる「エデュテイメント」となるのです。